

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Gray Scale

C

Y

M

Kodak  
LICENSED PRODUCT



重 鑄

日本書紀

夏

76  
5440  
2





76  
5440  
2



87841

<2000-300>

日本茶時記卷之四



夏

渾書律曆志云夏ハ假方リ假ハ大なり  
夏ハ假方リ假ハ大なり  
夏ハ假方リ假ハ大なり  
夏ハ假方リ假ハ大なり  
夏ハ假方リ假ハ大なり  
夏ハ假方リ假ハ大なり  
夏ハ假方リ假ハ大なり  
夏ハ假方リ假ハ大なり  
夏ハ假方リ假ハ大なり  
夏ハ假方リ假ハ大なり

素問云夏三月これと蕃秀云々  
夏三月これと蕃秀云々  
夏三月これと蕃秀云々  
夏三月これと蕃秀云々  
夏三月これと蕃秀云々  
夏三月これと蕃秀云々  
夏三月これと蕃秀云々  
夏三月これと蕃秀云々  
夏三月これと蕃秀云々  
夏三月これと蕃秀云々

日本茶時記卷之四



千人金方いらく元友乃石面くはらうして妙なる色  
人として面皮あつて癩を生し又面風とあつて心

又曰文七午二日昔ふ嘔吐食物とふ死辛をまして

肺字と書あつて

肉行いらく交月冷石鉄油をくを枕し瘰癧をたす

なうれたたに人の目と換すと

孝を徹よしくなれ書を契ありあふ菽を食ふ

これと書し契よつたうへく

金選更略いらく交徳禽獸乃心と食ふすと忌恐く

死守我益書と犯人宜く苦薬と食してい

これと書し

月令廣義よしく元日より九月よりうりまう一切瀟沔

及水とのむると忌又あつて監際とく

又いらく交月腎氣衰終とあふ房色と及とれバ元

氣と傷り来と換の宣戒之

又いらく汗乃衣裳よ透りくと日お晒し又これと忌

世はらうの癩子とせ

来書に書しよしく監更契と飲を冷水少くゆして

なまふ腫と乾板やむとくや沐浴とるや切

熱ゆへし又冷あふくと足と濯へく



又よく夏に暑時を居たに生外とくす熱とれぬ瘡  
と生一冷あまを瘡と生す

又曰五月に心腹に腎衰小精化して水となり秋ふむく  
則凝丸係齋一七法氣を固と一熱く熱物とくか  
腹中澄暖あり生瓜果氷水冷濁粉粥蜂蜜を合  
けう冷乞と食とれは多く秋時ふ心瘡癩とくもふ  
冷水とく休活一と面と洗ひ骨に淋く事なる  
人として暑熱眼晴く脈脈厥逆一寒乱筋筋瘡  
乃瘡とゆせむ風と熱く多なるれ眠中一人臥  
ちく扇と揮しひら車なる汗体毛孔開展とく風邪  
へやひこれとむせんとして風痺石に言ぬ寒温の疾  
と熱む年壯りして即言とくふくくくも亦瘡根  
を掃くあり氣衰方人を標教乃害と意とるに  
瘡中もろくもこれとて一

強まらうよく夏月内は微法有り冷水との瓜推生冷  
の細宜くゆく食一ゆけとくこれと秋冬瘡癩  
と生一と事とくもぬふ

夏月暑よ傷くもく身熱たれり瘡とる人有り伝  
これと夏瘡とくも病瘡よりく暑と眼と人  
又万葉集十の巻大伴家持吟嘆瘦人哥



石麻呂爾五物申夏瘦尔吉跡云物曾武奈使  
取食 瘦纏五乃夏瘦と作る事野書云々  
見え作れ給しけよまこまこ事なり

四月

新交の二月乃節時歳を二月の中○三月は五月 余月  
乾月 徳と仲良し○四月は八月と仲良しと云々の事  
ひつちゆへううれ九月しよと  
略せりし奥義抄云々

朔日 國信今日より八月廿日まで 給と恙也と口を衣  
かといふ古言にせざらんや

八日 滋佛日なる灌佛とてしよる佛僧よ是の滋佛と  
るよ都梁香とてくまの香も一箇合香とてつく香  
色もと一丘澤香といふ事也水とて清く香とい  
て黄色水とて安息香といふくまの香も一佛頂とて

清くとてより月建れ後よりハ洗ふおふまゝにぬ  
か朝あくる今日佛よ水と清くしひりより推古天皇  
の御宇よりしよるまゝにせん

十五日 浮屠の結夏今日よりしよるまゝに七月十五日  
よりして終り是と解ふと云はる九十日甚長とて外  
よあすも本堂親等とてあくる事とれろくろくあ  
たり也 祝苑云規一尺えり

晦日 沐浴

今月梅雨よ先くして雨乃漏るるやうに梅雨候と



田家磨よんをえりけりよ喜む程毎ち多く月を  
梅あつは月かつおと之く早は信これとさうじ日  
と云天守より日もさの時をさし庭宅と修治して  
功多しこれの磨六典に定役三功とて造地修治を  
まぬはけり事とのまより四月より七月まで功  
と云二月三月八月九月を中功と云十月より二月  
を多くと短功と云と作りあつまは月比日比は  
修治の功多ししてたさるものたりし一又は月比  
梅あつは梅あつは梅あつは梅あつは梅あつは  
よ又年のむなうりさうり

は月を氣に記し書畫等と日記晒しておのめお  
へく紙又糊とつけさるるをさうりまは梅あつは後  
とひくもゆはこれの徴とひと月令度表よんより  
衣服と志林のりまは梅あつは梅あつは梅あつは  
日よさうせハ前並女使とて徴生せす  
此月あつは筆を塩漬り貯へりは先はと  
てこりさあをさうりさうりさうりさうりさうり  
入桶よすくよ小米をちかぬまをさうりてさうり  
つけまへり又筆とさく皮とさうり熱湯あつはゆひ  
懸し然ちく收貯用り何米満よんりてすの色の



去く解あり塩羊の塩湯に之をいれ湯に之を  
一匙一匙用ゝるなり

六月一日(三)そのまゝ大豆(ま)胡麻(ま)胡荽(ま)薑(ま)  
純陽の月をまゝに精氣を保養して(ま)酒(ま)を(ま)飲(ま)む(ま)は(ま)夏

廣(ま)き(ま)し(ま)り(ま)又(ま)け(ま)月(ま)暴(ま)怒(ま)して(ま)心(ま)を(ま)傷(ま)事(ま)なり(ま)也  
これとせ(ま)せ(ま)秋(ま)必(ま)瘧(ま)と(ま)す(ま)又(ま)常(ま)水(ま)を(ま)飲(ま)む(ま)面(ま)と(ま)院  
ひ(ま)す(ま)く(ま)事(ま)と(ま)し(ま)

五月七日(三)と服せ(ま)六月より始(ま)く(ま)の(ま)じ(ま)一(ま)男(ま)林(ま)集(ま)要(ま)に  
去(ま)夏(ま)を(ま)腎(ま)氣(ま)丸(ま)と(ま)し(ま)又(ま)又(ま)八(ま)地(ま)黃(ま)丸(ま)と(ま)服(ま)せ(ま)

冬(ま)ハ(ま)味(ま)丸(ま)と(ま)狼(ま)と(ま)ら(ま)ん(ま)ら(ま)し(ま)と(ま)り(ま)と(ま)味(ま)丸(ま)腎(ま)氣(ま)丸(ま)  
地(ま)黃(ま)丸(ま)ハ(ま)同(ま)用(ま)也(ま)又(ま)味(ま)丸(ま)ハ(ま)味(ま)丸(ま)に(ま)附(ま)子(ま)肉(ま)桂(ま)と

か(ま)ら(ま)り(ま)又(ま)味(ま)丸(ま)ハ(ま)味(ま)丸(ま)に(ま)附(ま)子(ま)肉(ま)桂(ま)と  
肉(ま)桂(ま)又(ま)味(ま)丸(ま)と(ま)か(ま)ら(ま)り(ま)の(ま)り(ま)味(ま)丸(ま)腎(ま)氣(ま)丸(ま)と(ま)り(ま)は(ま)と

治(ま)す(ま)意(ま)匠(ま)生(ま)活(ま)の(ま)か(ま)ら(ま)り(ま)と(ま)味(ま)丸(ま)より(ま)切(ま)更(ま)大  
ま(ま)り(ま)意(ま)匠(ま)生(ま)活(ま)の(ま)か(ま)ら(ま)り(ま)と(ま)味(ま)丸(ま)より(ま)切(ま)更(ま)大

六月乃(ま)去(ま)候(ま)才(ま)一(ま)體(ま)烟(ま)才(ま)二(ま)塩(ま)出(ま)才(ま)三(ま)玉(ま)凡(ま)生(ま)才(ま)  
去(ま)夏(ま)の(ま)候(ま)才(ま)一(ま)體(ま)烟(ま)才(ま)二(ま)塩(ま)出(ま)才(ま)三(ま)玉(ま)凡(ま)生(ま)才(ま)

去(ま)夏(ま)の(ま)候(ま)才(ま)一(ま)體(ま)烟(ま)才(ま)二(ま)塩(ま)出(ま)才(ま)三(ま)玉(ま)凡(ま)生(ま)才(ま)  
去(ま)夏(ま)の(ま)候(ま)才(ま)一(ま)體(ま)烟(ま)才(ま)二(ま)塩(ま)出(ま)才(ま)三(ま)玉(ま)凡(ま)生(ま)才(ま)

去(ま)夏(ま)の(ま)候(ま)才(ま)一(ま)體(ま)烟(ま)才(ま)二(ま)塩(ま)出(ま)才(ま)三(ま)玉(ま)凡(ま)生(ま)才(ま)  
去(ま)夏(ま)の(ま)候(ま)才(ま)一(ま)體(ま)烟(ま)才(ま)二(ま)塩(ま)出(ま)才(ま)三(ま)玉(ま)凡(ま)生(ま)才(ま)



五月

節と芒特と云中と割平といふ六月の忌忍仲夏事形  
諸形 律と懸實と云〇六月の和名と云うこといふ田こさ  
あつたかろぬふか月といふと  
懸せりといふ候物よんさなり

四日 沐浴 糝と糞いひし餅糝と糞いるふもらふ〇と  
用ひす 糝米とこらめくひくし 糞米とこらめくひくし 沸湯い  
てあぬなり又沸湯めくひくし又うへ米こら米糝  
分けてあくくす 糝米沸湯して糞いし 糝米  
餅とハ米と麩いを引くはこら餅はくつこら  
とくし又糝と糞いし糝米乃取汁めく糞へし  
月令度義よりえたり唐代は端午れ糝を米多し  
角糝共糝角糝而糝糝九糝餅糝糝と角糝といは

又糝れとくし又糝糝れとくし又竹の筒れとくし

糝乃糝のあゆくし 糝米色れ糸と糝い

糝米と糝米のくつめくし 糝米色れ糸と糝い

我 糝米と糝米のくつめくし 糝米色れ糸と糝い

乃 糝米と糝米のくつめくし 糝米色れ糸と糝い

又 糝米と糝米のくつめくし 糝米色れ糸と糝い

又 糝米と糝米のくつめくし 糝米色れ糸と糝い

明日糝と糝米よ送るし

〇國信今日艾草蒲と屋れのよに扱いむ

扱と扱と糝米のよ月より艾とじをひて人れ形の

よくよくよんこれ糝米とくしとくし



因依艾草蒲との三に據じてもあまきことあり  
弘化式に五月三日平旦に草蒲草をて南政の  
前よりとくとのむはこりけりてみたり  
又松芥抄に五月四日皇後實草内裏敷合草蒲  
やけり松中納を松乃あよ 玉玉集  
まかことあやあらるる松にさうりん  
ありぬり草生乃やと

五日

端午と云又云五月五日  
又宋陽表は五月五日仲秋日始午迄の月凡毎月乃又月これ端午と稱す一は月二のと路をくすしあらるる世俗あをすみ月入口と 因依今日松とくし草蒲酒とくし

且今日より麻の衾衣と云く八月晦日は

糶とくぬり糶新造記よりを屋原五月五日  
まづ泊屋に投して死と楚人これとあをま  
あは日にちり毎又竹筒れ中み草と野み  
投してされとあり渾の表糸乃何也乃飲  
同といやの海濱と云けりしに一人あつて三  
岡ちまとな業同はゆくとく我毎年こつと  
事とれりこりゆふと堪りてうれと事と  
故詔乃と免よりれ食物とぬとま今よりれら  
橋樹のまをといくるとつとみ線の糸とて



結ゆび下し一いち凡なん二物にぶつを按あつか診しん乃すなはちさうさくおまるとさう  
今日けふ粒つぶを食たふはは忠ちゆう意いをううさうう月げつ令れい廣くわう敷し二  
し屈くつ系けいうう婦ふ名なををこれこれとと使しけりりてて屈くつ系けいとと取とひひき  
系けいををええささりり又また粒つぶをを血けつ鬼きよくよくここりりたたままははたたちち  
切きくくこれこれとと食たふふハハ鬼きとと降くだ伏ふくすす義ぎありりとと使しけりり  
晴は明めいくく後ご々々んんええりりかかううややううのの使しけりりささりり  
使しりりのの使しけりりささりりとと人ひとやや周しゅう々々んん風ふう虎こ虎こはは  
ららのの荒あ蕪わ々々とと使しけりりささりりとと使しけりりささりりとと使しけりりささりり  
ははこれこれにに湯ゆをを包か裹くわいささるるもももも教がええたたりり  
ここららととゆゆりりのの使しけりりささりりとと使しけりりささりり  
五月ごご一いつ法ぽう生せい  
すすたたららなないいままいいままいいまま

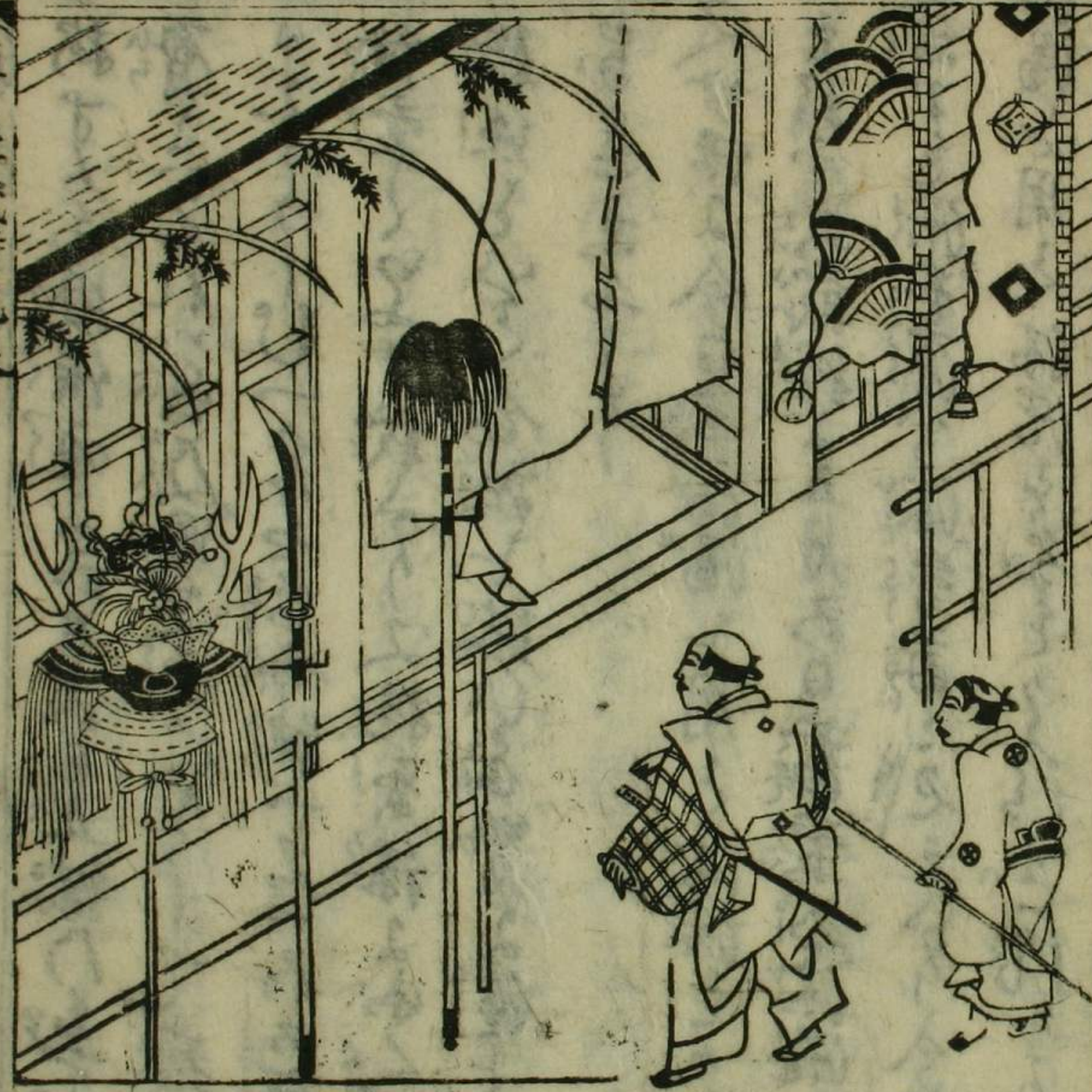
包か裹くわいととささるるもももも教がええたたりり  
多た敷しせせいすす  
又また葛か湯たう酒しゅうととののむむ事じ案あん時じ難なん記き一いつ午ご  
日に葛か湯たう酒しゅうととののむむ事じ案あん時じ難なん記き一いつ午ご  
ううととててこれこれををのの火かのの湯ゆ氣きとと助たすきき年ねんととののぶぶやや  
ととりり山さん泥でい丸わう帯たい乃すなはち葛か湯たう酒しゅうととののむむ事じ案あん時じ難なん記き一いつ午ご  
使しりりのの使しけりりささりりとと使しけりりささりり

○又またのの一いつはは今日けふ藥やくととてて葛か湯たう酒しゅうととののむむ事じ案あん時じ難なん記き一いつ午ご  
十じゅう粒つぶととりりとと色しきにに赤せきををここすすののててひひちちののからから使しりり  
又また葛か湯たう酒しゅうととののむむ事じ案あん時じ難なん記き一いつ午ご  
又また葛か湯たう酒しゅうととののむむ事じ案あん時じ難なん記き一いつ午ご  
使しりりのの使しけりりささりりとと使しけりりささりり

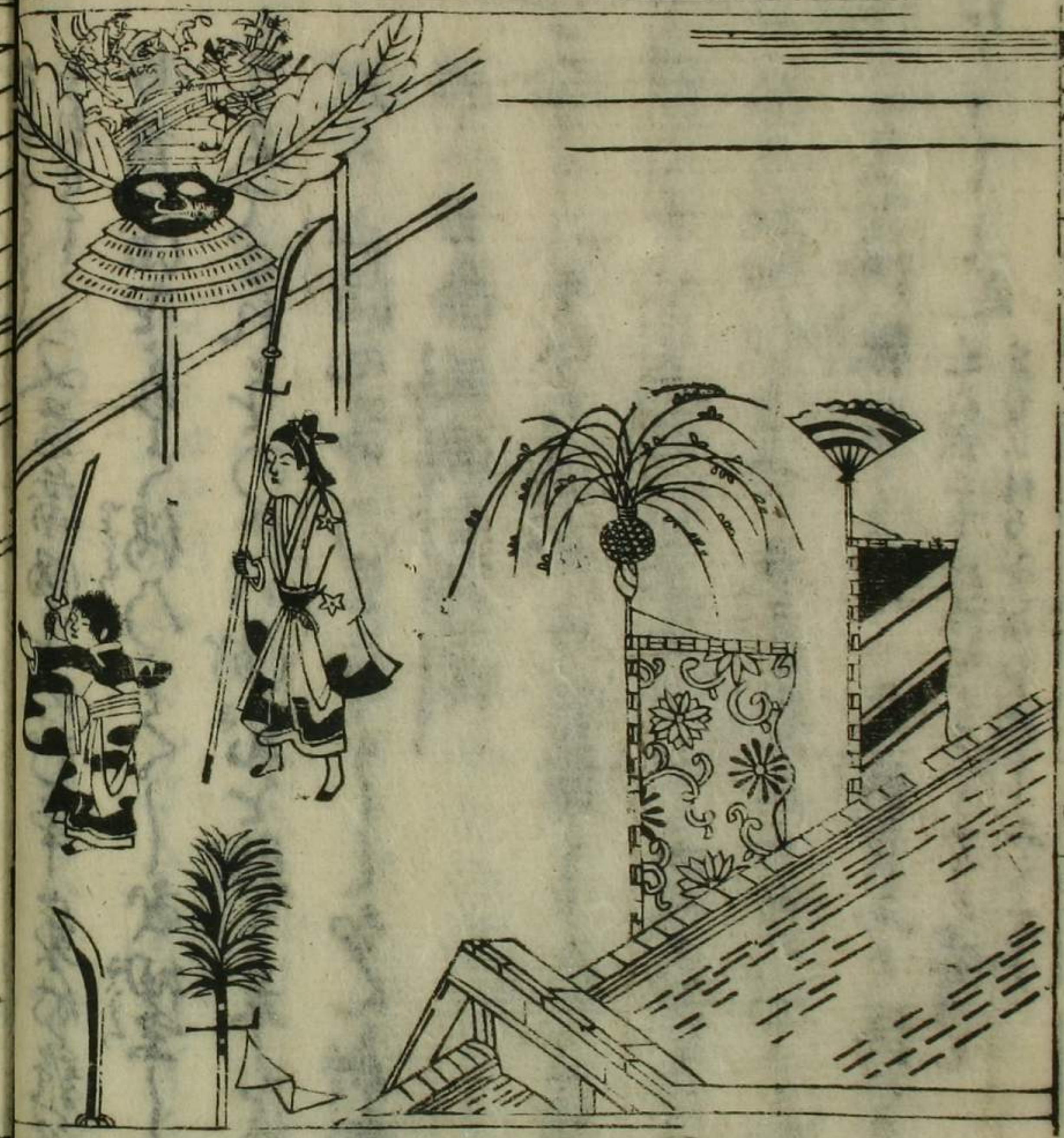
本草綱目卷四



木下房身言卷四



木下房身言卷四





梅すん小風信通よみ日五日五線乃多とめて  
脅かくれい舌及鬼と通人をうして痘疫とや  
中さくく一む一名を命纏一名の色纏一名を  
纏索とよと載り又投棄線よ小人端午よ  
雜線といく合款と結いぬ賢よ纏くとりか  
るきこ意あし

○又世傳よ今日若湯と用く沐浴とるなり  
梅と小大載禮よ五月五日菖蒲浴とあり  
楚辭よ浴菖蒲兮沐芳華と見えり今世人の若  
湯と用く沐浴とるなり

○又今日婦人女子たつよ高湯と浴よ挿こ又  
勝よまよふ如此とれハ痛と痒くと俗よいひやり  
某時雜記よ端午乃日菖蒲艾と雜て少人形よ  
飾り又菖蒲の根れここれと帯まハ邪  
毒と辟と祀せりかふ志俗よ玉泝るハ  
いりこく明知知是天中節旋卦菖蒲芳華  
又菖蒲の根よ玉燕叙既艾虎輕

○今日京師若菖蒲乃根れこ競るあり邪友七日の根れ  
潔毒として毒ありそ敷二十足朝日よる乃是とそ  
ろく一二の菖と定め日よ根れと悪くそ又玉菖



二乃より名へり膳有乃本とて下場乃西の方に楓葉  
 有り気よりわざと落し下りて草とくれりると見ゆす  
 楓葉法く群集とを伝故よ下場れあてりてあせて  
 大赤り柗れ樹よの有りてしやをものはなりと有り下  
 樹又横あたるひの三有りりまのそのの増れあてりて  
 多らるるさけり枝をつててこひたるのせめあたるを  
 乃るにさるるの様に群集れ中へけとあびさるるそ  
 こふ竹林とつはらるる乃路有りきらふをのれ打  
 ちつまらるるを定るとぶうとくに就めあがり  
 横よまればたのみのたれたれたれとくせよと  
 息よあがり草とてうしあをもあり又人さ川中まをん那  
 けりて川よとち衣裳とぬるして下りるものありまじけ  
 濁翁とをたれとくすまて決して客人の様たるよりふ  
 こにさるるさけりす落るるとより元冥の村民は社人  
 なるす参白よありこれとて下りて休あり出るといふ  
 我あれ出るといふよりこまはたまの操大といひあ也  
 ひりの大回我唐殿有りては日に競る疎村乃事一  
 有りては位よとて下りてまらりし延喜式よまのせり  
 祀多解情よといふも又月より代新天宮ありわれつくと  
 くる路く我に殿に初幸有りて六府詔射乃り有り



又日のみ佐いよ大人をいふるに案ありの案乃いふ  
 丹葉く競ふ乃事あり云々今聖書あり頼の足  
 五りく競ふとありいけいけいけ競球走るといふ  
 持とゆふ文易雜錄に編年日走子河之勝柳と  
 あまいありてまき今日るとまき山の子のゆめし

○今日山城紀伊郡深草乃里岩井森のあまうを  
 禮とあて競ふあり此社を延喜式より古懐す  
 乃神社なり日本後紀に鴨別雷神社の別也や  
 とりてりいふ又三所れ皇太子といふなりあま  
 子良親王伊豫親王井上日親王也今日案

丹波乃山城素木乃中えをれを天皇身これ  
 沙乃乃皇親王に大將軍として追放ありて一宣  
 方乃のまきを尚社に祈誓して終ひて又月ありて  
 去後乃社幾ある一とて信又大風吹きたりて大湯波  
 とひあぐ一もあぐは兵賊一戦もあぐは波とあぐ  
 ひあぐとくもあぐひとるも尚親王乃出たふ  
 率勢乃さ海とまあひけりとも又都那の巻み今  
 日葛湯のかもとた力とりてあそふ事とゆふあ  
 ぶあそふりけいひ事むり一八巻紙入人形と不



又付海に松と曾此形より人並に草花の意に  
 仰り草木と藻も力のつくまづのまゝして戸部  
 仰りしつるを平の風俗美巧と云のまゝ本と  
 人言此形と云ふ又云くこらして葉を花と  
 或甲冑と云ふ初戦と云ふ世に戦閑乃勢を  
 先く戸部よして仰るをとかざくしふ又紙  
 云くく乃徳と云ふは古軍一つ帯と云ふ戸部  
 たる仰りこれとのやいと云ふ或緒と用るも  
 古流をかえて是と快を云ふと云親自より  
 又思ふ此事と云ふ

採と云ふは入るるもこれに他の方事  
 雜記ぬとく場中不却の人天師を盡て  
 又土をく天師を仰り其と云ふ  
 又く巻をく門上よま又其を採  
 飛に他つて戸乃よまかれの毒  
 〇今日まあせらるる事あり  
 又日臣民後之  
 ありと云ふせり  
 日事記は  
 二五事と云ふ



又章第云の瘡又今朝刺草の宜男と何の歌あり  
 圃より乃の石共風合の鉢盆襪百多の香もゆり  
 百草のけと持より勢と膏と膏葉に記を  
 色と百病瘡を貼して膏の膏葉と功十倍  
 せり又今朝日未お何百多と搗之汁とつこ出  
 石灰と和志と餅と膏とす一切の全瘡と伝  
 じと月令廣義と凡之とり  
 百草と取と牛膝澤漆五葉  
 草とすすと命付也略  
 凡之とり牛膝之胎と膏と伝  
 毛葉と凡之毒葉と凡之とり

○夜集草ととも九朝の月なり又女草と云初む  
皇朝の五月五日  
 昔採天治百毒

と但艾乃苗子と云けさるるよりと誠之鬼英に  
 凡之とりおれらる艾も佐多とすり又搗何  
 くれの用入りはされも伊吹もくさの性又紫金  
 統は金丹千金錠子と合はるを今日より  
 ○又今日慧波と云事有りこれ居系と云く小送意  
 たり  
月令通考云六地也と引て慧  
 波ハ越と句越と物と云記あり  
 石屏り踏午乃香  
 榴花角黍菴薯時新何處と云る流標堪笑に湖  
 老持客也也隨蒿艾上柴門  
 又 友人  
 海榴花上滿るる身切首露浣濁醪今日榴花を用



中又為天痛飲漢雜語

十三日 日竹と後裁へ一書事は月十三日と作碎  
照らす又作迷目もいふ此日竹とうゆさうか  
新の派とあらり

晦日 休浴

日月淫友とこれと梅とらづくと又飲面うもかきり  
梅雨れ中肥の芙蓉石梅梅枕をよの枝とあつひ  
てさびししと月金座義よりえたりは時勢全  
つし蓄積水櫃をよせよ甚しく活又象象人功之  
とくた守と奴僕事と度しおこたりての家利潤

りし梅雨之霖の中と流儀をうて薦と何ん  
願とけつししと一薦を書籍意お食油も  
新日裁しつるお木菜蔬よわりの梅屏と葦曲へ  
そ効用度し又梅雨必と大穂と貯至茶と煮  
とれいといつる美多りとも書海に刀え下作日  
とへてお飲つる妻又梅雨あふく痲疥を治へ  
る此おこれ一薦とゆりよこれと用意の費し  
やとく衣汰りつるこれと利れの度けのさし  
東垣の食おおきく見えたり  
梅雨あ入り夜給とて一決し新し屏鏡よ



且く周人其後の後殷より日と入梅す  
 芒種後五日あり日と出梅す此種極に  
 種乃後西にあり日を入梅す  
 二あり日と出梅す此又種全極より  
 乃後五日あり日と入梅す  
 乃後五日と出梅す此又種全極より  
 後五日あり日と出梅す  
 日と出梅す此種極より  
 種ありと入梅す此種極より  
 種ありと入梅す此種極より

初め和漢を小しきく乃後ありありきれ  
 況令く一換軒嘗若微雨況よく  
 有るの極と天候と海に定化す  
 時候必有運速  
 兼夏書恐ふの極信  
 此言乎  
 初日あり梅  
 世信の極あり



梅と湯の重畳乃抄に塵耶夫人の中陰に命たり  
此不善なりとあり悪事とのづくとり予サリ  
中々其の七十二候乃内なるの才二候を其の  
附合して新法をとりたり

夏正の日井と後水と改れん瘧疫をわすれと僅此礼儀  
志よ及こり又及ぶ乃後雨丁は所より日まぬの交  
とされハたにあ〜〜千金方に去るなり

は月乃初春梅と九皮とさづり梅と去落よ入決と  
はりまき後收用と鳥梅と此皮あつた時とそく  
へ〜又梅つち梅りをも製法へ〜

此月米苞を改米ぬ〜〜此の苞ゆめハ〜  
生ハ又及乃石拾穀乃原と多く米苞にぬり其ハ不  
は月天極中腕も〜〜是月の〜〜保をす〜  
又梅季と保音と〜〜梅致餘論よ〜〜  
宿る漢味競〜〜於老渡也保貴金水二騰正爐火土  
之胆尔

月令よ〜〜是月也日長正陰陽争死生分君子畜戒  
掩刃母澤山考色母或進后後生母改和節者欲定心  
曰是月也〜〜居之觀可〜〜幸眺望〜〜升之渡〜〜生  
保〜〜此月於井及深穿乃中〜〜



あり一先龍乳毛と云くその中にとく一なるは毛  
旋舞と云くものちとれりこれ毒ありなり

此月進とくこの力より一之目を括すし全匹馬腹より足

より又膏餅鯉魚雜及未熟せざる果とくぬりかかれ

鼈と鮑魚とせれどく食へくは又枇杷と炙肉糞麩と

杞子とく食ふなり月令度義十考  
葦書にちるせり千金方に持麻の肉

と食ふなり又金匱要略より又六月泥中の停水と

飲するなりれ魚鼈乃持此肉にけり毛とのめば瘕となり

は月費人の目に苗と挿し又圃に大葱乃たねとく

ゆし一翌日よはすとありとく

又月のち候才一控娘生才二懸胎鳴才三反舌草

太芒持れ三候あり才四麻角解才五燥胎鳴才

六半反生太反玉乃二候なり

芒種至六十刻二十分夜三十九刻四十分及至

六十一刻二十分夜三十八刻二十分 月令度義

六月

節と小暑と云中と大暑と云○六月の異名 季夏 暑月 伏  
御を極終るいふ○六月乃和氣と云夏月といふことにはつじ  
てはとくはあふれつさうなり

朔日賜冰節と名つく今日氷を食ふなり梅とあり

仁徳天皇廿六十二年六月に額田大中養皇子誕生也



しよ水のわたりよ出給ひ申心よ上るに降中と云やり  
給ひしりの廣庭とゆりしるやうなるは所り人取  
つらうして心せ給ふよ庭ありと申す何れのふ乃  
何れにゆり人を考して問せ給ふよ氷室なりと  
申すその氷といふやうにして細むりると問せ  
給ふ答て申すくさくと一丈餘りありと申す  
るに草葎れと云やうに氷と申すはまはいつ  
つらうの六早もをけさくと云く契月工用と  
申んそ何れに氷を化凍帝も申せ給ひ給れハ  
とれり皮膚感ありしう一日幸給よのきり日な

ぬく氷と申す初まりを後より申すくはこれと  
細くぬく氷と申すと申れゆりしを記せまて  
丹波のおくよ氷室ありと申す又高土の佐著  
乃大いなるより氷と申せしる民問へハ  
蒸騰繁せと申すたぐり今日命して氷とく  
らふよ申す

りろくしよ氷とおさむり事あり周強し凌人  
職と云氷室とつらうなるなり去冬は極寒  
下降ふ迷谷より氷室と申すくさくと申す夏  
は極く暑きと申すけりしあり氷は申して解け



十三日物も毛漬二之日整氷沖三之日細之凌  
 といり左傳小日在北陸而為氷西陸朝觀而  
 といり是も凡氷は地を穿て出ひるをといり晋  
 の石季龍二伏の日氷井者於氷と云く大陰子  
 阿之一平 難中記一とありの夜  
 十六日 秋繼を製する日あり 製法は、  
 此記より及りぬ

十六日 日望よりといりあり 秋林に葉物落し  
 といりハ嘉祥とくたて 仁明乃と云くも 秋木の比ひ  
 不泚代乃さうのきまはひぬ せぬ一 命 冥夜との  
 厚一乃よをくくつてはくし 亦とあり 不泚代はた  
 了ら月十日ありといりも 命 命 命 命 命 命 命 命  
 かりくやをくくして せの日也にあられ 年号なる。わた  
 て 嘉祥とものでくつてはくし 亦とあり 嘉祥とくつて  
 といりくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 といり又二部の子の夜に 連代世任と云傳らつて 命 命  
 大権の時より月細流のりそひぬと云く 揚子と云  
 といりももものといり 命 命 命 命 命 命 命 命  
 て 命 命 と云くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 宋乃寧と云く 年号より 十七年あり 命 命 命 命 命 命 命 命



歳は元年より十三年までの事一はるは十六歳河  
 津老と今日一人の事とすその代はさむなる  
 古れ申後たりあつたれとあつてもあつても  
 今指とゆは申事物終の程よとすその事  
 事なる海よ久しなるよあはれなる事とす  
 江島津舟なる根原年中の事とすその事  
 ちと國史も志る事とすその事とす  
 得れぬ事なり彼の事とすその事とす  
 於中朝の事言にさるる人を終め

晦日 活け日と月とく事なり世後國事よ

年と秋との事とすその事とす  
 武王皇乃御河なりとすその事とす  
 こととすその事とすその事とす  
 二ありとす

その月代なるの事とすその事とす  
 の事とすその事とすその事とす  
 乃國代の事とす

事とすその事とすその事とす  
 事とすその事とすその事とす  
 又近き事とすその事とす

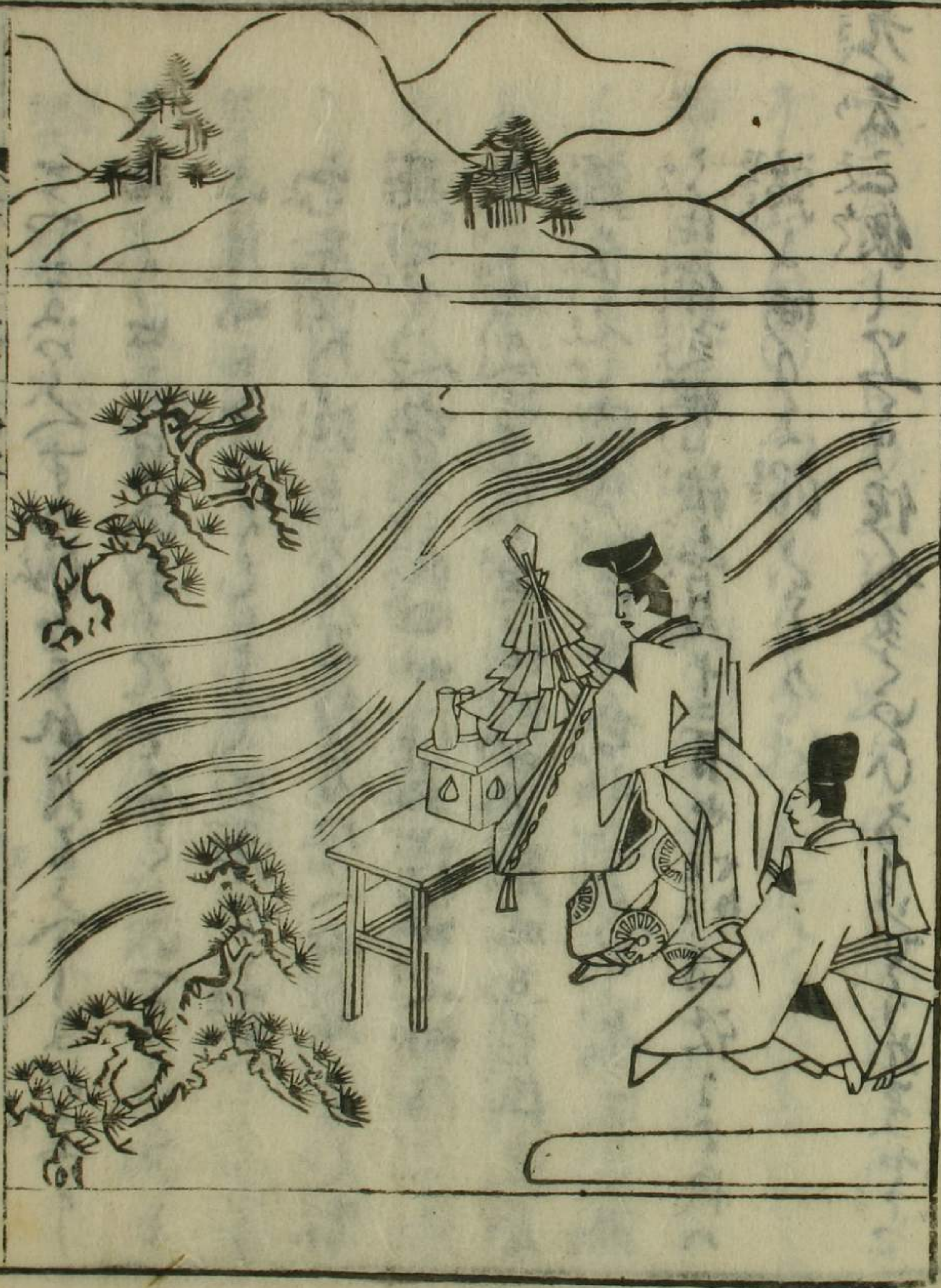
集ふ事とすその事とす  
 或部とすその事とす

後接は



とつひにたをさるひに寝居る中位にほつるよたふ國  
をくまの木のこたん少異なり一月小同月所りの後  
りつ世さかりわむやとらよははれ月よあつてとふ  
事<sup>うらなう</sup>東<sup>うらなう</sup>按<sup>うらなう</sup>よええなり又今日川系にせう麻たきさ  
人形とたのまふ紙方てくまるとさうて川がーカリす  
と燈<sup>あかり</sup>相いふ

い中<sup>うらなう</sup>御<sup>うらなう</sup>好<sup>うらなう</sup>よ<sup>うらなう</sup>くく<sup>うらなう</sup>八月<sup>うらなう</sup>被<sup>うらなう</sup>寝<sup>うらなう</sup>寝<sup>うらなう</sup>ととく<sup>うらなう</sup>た<sup>うらなう</sup>む<sup>うらなう</sup>り<sup>うらなう</sup>成  
小<sup>うらなう</sup>なる<sup>うらなう</sup>と<sup>うらなう</sup>と<sup>うらなう</sup>ま<sup>うらなう</sup>の<sup>うらなう</sup>海<sup>うらなう</sup>邊<sup>うらなう</sup>よ<sup>うらなう</sup>あ<sup>うらなう</sup>十<sup>うらなう</sup>串<sup>うらなう</sup>た<sup>うらなう</sup>て<sup>うらなう</sup>あ<sup>うらなう</sup>の  
ま<sup>うらなう</sup>ち<sup>うらなう</sup>ど<sup>うらなう</sup>い<sup>うらなう</sup>く<sup>うらなう</sup>ま<sup>うらなう</sup>を<sup>うらなう</sup>り<sup>うらなう</sup>夕<sup>うらなう</sup>又<sup>うらなう</sup>ち<sup>うらなう</sup>の<sup>うらなう</sup>さ<sup>うらなう</sup>を<sup>うらなう</sup>り<sup>うらなう</sup>後<sup>うらなう</sup>探<sup>うらなう</sup>  
て<sup>うらなう</sup>實<sup>うらなう</sup>辰<sup>うらなう</sup>川<sup>うらなう</sup>乃<sup>うらなう</sup>ち<sup>うらなう</sup>ち<sup>うらなう</sup>と<sup>うらなう</sup>と<sup>うらなう</sup>ま<sup>うらなう</sup>と<sup>うらなう</sup>て<sup>うらなう</sup>る<sup>うらなう</sup>月<sup>うらなう</sup>は<sup>うらなう</sup>ひ<sup>うらなう</sup>て





三やふりくすのぼる月もくくくは河原  
 ゆるりせき月のあつたときくくくくくく  
 正月晦日なりしときて翌月へくくくくく  
 乞食の乃海よりくくくくくくくくくく  
 疑之古人古月は必出川五流流之初原及徳  
 作のゆきなむれ無恒例也不限時月  
 孫もえは比叡人記海念小令人可参時月被  
 く由備之件法正月十二日也是日は法よれハ  
 強又晦りくくくくく  
 九月三候しりくくくくくくくくくくくく  
 夜三月九十日あまのくくくくくくくくくく  
 たり何のうりうりうりうりおまといてはまよ  
 志く冬北水よかたる氷生木なりな火のく  
 志た木より本生火なりをわゆるして秋の金  
 火の金今く金火はくくくくくくくくくく  
 くるは候り庚を金なり三伏といふは乃後  
 第三庚と初候くくくく庚と中伏くくく  
 才一度を末伏といふは三伏といふは乃後  
 癸卯乃大寒に就くくくくくくくくくく

夜三月九十日あまのくくくくくくくくくく  
 たり何のうりうりうりうりおまといてはまよ  
 志く冬北水よかたる氷生木なりな火のく  
 志た木より本生火なりをわゆるして秋の金  
 火の金今く金火はくくくくくくくくくく  
 くるは候り庚を金なり三伏といふは乃後  
 第三庚と初候くくくく庚と中伏くくく  
 才一度を末伏といふは三伏といふは乃後  
 癸卯乃大寒に就くくくくくくくくくく











着られし衣服と滑石天竺粉若等分を煮て  
 付粉煮しつら又竹一五枚を煮汁にて自煮又  
 洗しつら二坪粉とひ研りけ漿汁にてこれを  
 のきつれつら又薬と用て洗てえし一漆  
 一けり煮しつら衣服と洗よの杏仁椒等分を合  
 研爛して洗しつら薬と搗き浄く洗しつら又雪  
 洗しつら衣服と冷みすく何しつら又白衣と洗  
 干蘿蔔乃黄叶又ハ葛湯を細末して水  
 に入れて洗へハ少くなりあり  
 新に煮しつら薬をも包むる  
 日ふあてし薬一と海草の葉ハとちり日よ平下  
 中合方ハとちり薬とちり日よ平下  
 うとくたのちりあり南州用ハとちり薬ハ日よ平下  
 新瓦器に入ちりしとちり日よ平下  
 又時より一年を煮しつら新に煮しつら  
 葉をゆきしつらとちり九世人薬と薬一貯しつら保  
 強とちりし薬ハとちりし事とちりし次葉ハとちり人  
 新に煮しつら薬とちりし物とちりしとちりしとちりし  
 入ぬきつらとちりしとちりしとちりしとちりしとちりし  
 入ぬきつらとちりしとちりしとちりしとちりしとちりし

日ふあてし薬一と海草の葉ハとちり日よ平下  
 中合方ハとちり薬とちり日よ平下  
 うとくたのちりあり南州用ハとちり薬ハ日よ平下  
 新瓦器に入ちりしとちり日よ平下  
 又時より一年を煮しつら新に煮しつら  
 葉をゆきしつらとちり九世人薬と薬一貯しつら保  
 強とちりし薬ハとちりし事とちりし次葉ハとちり人  
 新に煮しつら薬とちりし物とちりしとちりしとちりし  
 入ぬきつらとちりしとちりしとちりしとちりしとちりし  
 入ぬきつらとちりしとちりしとちりしとちりしとちりし

種彙考身言卷四

三六



口とてく許しきも〜ゆいといひ久し〜  
くせは元是事とたふるひ乃良法あり地更白正あ飯  
菑活の昔神護黄甚甘草なるたの時晒されぬ  
くろ池たり〜名志志〜く〜  
〜く〜のゆき〜

夏物も短へ〜ハ失く物〜  
〜相代敷日〜  
〜下ハ壁に〜  
〜よりけ〜  
〜一〜の〜

物中玉又ハ五倍子鉄薬〜  
〜手と収り〜  
〜惚〜  
〜と〜  
〜汁〜  
〜潜〜  
〜浚〜  
〜撞〜  
〜は月〜  
〜一〜



魚鰾食方と井中つりたけとまいたけ  
月令廣事とるやう又青魚酒と好の麴を  
ふとのこくおこ酒とうれかよつて油の中へ入  
至ハ之一之指を以麴を餅とあつて食く一之也  
唐の香肉と見く一之又麻雪氷を新造するは魚肉  
と漬一之ハ極きす

五月は鰾一は草とてまのよけは味もよく食して  
此のくきり酒の又あつてとくつよくとくは能く  
子繩と名く井の中よとらるは産のかくは  
いふやとよはくまけま一之ハ外はゆせも好まひ

酒もかくはくま一

六月は林も也よ水と薬と多く依好一ハ山林をた  
取も多く買貯ま一ハ家取れ味あつて割てゆて  
一ハ又炭して買貯一

菜丸と多買と蒸と一脯と法一

○乾丸と一ハゆり法 丸とてよまかうこと  
凡乃片玉れの内八九分を塩と入一夜ゆ一とけ  
翌日水かしくゆらうら一と日くく日よゆ  
之しをゆすくは又煮るよゆらふハつあつて  
後行一



○凡と糟淹よとの法 世傳は蜜につけし凡と之  
 酒より酒と丸くしつとこもあつひてあ  
 乃未だやうよかきう一凡乃片置れの内よ塩分あ  
 やと入凡あつくる丸分目を入榘よ入すくとは  
 つけ二枚あだく丸かし一を塩汁にてあひて塩汁  
 のせよくはやくく日よあしきく凡よ糟を多くぬり  
 せよと榘よ入すつて凡のつぎあぬやうに  
 入のせよくあねありし方こくに  
 中世より一た抵糖を斗よ塩分合やせよと  
 糟多く凡とくちたがし一凡多く糖すくちた  
 俗の製よくし凡とけく一凡あつとつと

酒と一の瓶の口より風ひぬちるもこつと  
 赤土あまぬりぬき一榘をひろく  
 せんつけるうし一榘つあつとつと  
 乃くしきくやうく一凡の丸くさつ  
 うし一又煎豆あまも一二枚塩よつけ  
 うけく汁とあ糖よけくれ  
 瓢菓子かき干指し一或塩淹して貯  
 ○凡瓢乃製法 ぬ天氣とうくひゆ  
 多つとて糖よ切を切ふと各うすく



あつて入る後左かして繩よりけくやひさりの一  
天草わくくたのこく水入天氣好付  
繩よりきくやひさりの一  
まき一太代こくやひさりの一  
又魚のりまきしとくや味あはく

○塩干瓢乃製法 瓢と大片を切塩をつけて干すと

くちを並しつてくちを口れてるけくや一  
入 被るまき一味草のりまきしとくや味あはく

○乾芥子の法 日干の芥子と水はくと煮て干す

て干す用ひの何れもくちを口れてるけくや一

小加へくちを口れてるけくや一

○紅豆塩淹の法 未熟な豆を塩水に入れて煮る

くちを並しつてくちを口れてるけくや一

みも又かくれくちを口れてるけくや一

け月油中へ細く切ると製法

○揚げ油乃製法 大差 大豆 塩 各一石 水 二石二斗

煮てつて 先火煮とあつてくちを口れてるけくや一

石向くくちを口れてるけくや一

まの粉とりくちを口れてるけくや一

るす種塵の地付くちを口れてるけくや一



一石といれ大釜あつらふく煮るも湯湯と大くふれまよ  
 しくわふとひししてをわつらふとた方の厨瓶に  
 他へ入るいさめてもよう他へ入るよく棒初り  
 家内内へまはらうりま十日後の元日かままでこも後  
 四よか入をわつらふく水つりや止か入つらうり他入ては十  
 六日かまいこく煮と入へ右に白きやくいふ米まき  
 水へ半入煮ま煮て塩まき入よく拌せしゆ冷ふら  
 西大れお油瓶へ入るうまじ日敷三日か日をくく湯と  
 うまきくくうまきくく桶のこくくく元とあ者そ桶  
 へ入るくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 初

作り一日の元七日ぬるをくくくくくくくくくくく  
 流し毛をくくくく後毛味搦くたうま昆布と切て金に  
 味よくたうまきり  
 ○ひりやの煮法 大豆 大麦 小麦 塩 水 米 豆  
 まはかりやくいこくくくくくくくくくくくくくくくく  
 とまきまきくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 たう水と塩とくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 他へ入るは日か他日かり味かきう河魚へ一籠の  
 豆と他へ入るは日か他日かり味かきう河魚へ一籠の  
 味よくたうまきりやくくくくくくくくくくくくくく  
 味よくたうまきりやくくくくくくくくくくくくくく

本草綱目卷四

三十一



とくく一統のほどとまらなく申くす

○漬物細豆の製法 大豆をゆき小麦粉をゆき  
とろろ豆れしく煮糰し小麦の粉とをまきしき  
み入麴をすのろりきき水と煮よ塩をみ入て能く  
桶に入さす一たれ麴とくくして塩けの内へ入又  
煮く生薑の粉は薄皮たきと二三日に刻てり  
乞とも麴と一たれ塩けの内へ入ききして  
とろろに塩けうくくくくくくくくくくくくくく  
之十日をくくして味よく付るくくくくくくくくく  
煮て申くす世の口よりやて壺に漬免きく

○又納豆の法 大豆をゆき大麦をゆき塩をゆき  
豆れしく煮く煮とすくくくくくくくくくくくく  
豆肉を律むくろくくくくくくくくくくくくくく  
土をゆき入かきくくくくくくくくくくくくくく  
よ今七月初に重製皮をゆきそのとろろは煮  
白胡麻油皮をゆき三日やとゆきとくくくくくく  
日よりして又ゆきと煮くくくくくくくくくくく  
○金の寺鼓の製法 和州道下とよの紐巻也  
大豆一系ゆき  
引くく皮とを煮く細くをあらひくくくくくく  
能くくくくくくくくくくくくくくくくくくく



の大をこくとつらうして乾く藥したる時初末のを精  
 と秤せ土を重し入粉せよく練しちるにそ建麻の付  
 一斗一日毎に蒸かして厚くしゆらふ此れを麻の汁  
 合た蒸すく灰とて冷乃焼よ合せ桶に入せよくけ  
 一夜五明りよく乾くまでよく練をしつて見せかき  
 妙妙しむかひせよせよ桶に入せよくしてせりしとよく  
 つけを毎日一うなりせよ十日許して後蒸す  
 此種皮の根種葉の葉種と焼やよく切よく拌又あの  
 しくよくこくして蒸すことしる至毎日うらませ七日  
 までよく用へし二四十日よ及んぬ味つくまで後此

丸煉はんを尋ら丸人乃好まるとなり  
 ○蒸す粉の製法 粉と酒と等しくよ合せ蒸す  
 焼くことせよひは月去月乃中蒸かすか小玉  
 炭日よ粉一七十日をとてこれと用ゆるもの  
 たらやと酒と水と等分つて入毎夜此れを中て  
 よく蒸す方と粉とよく蒸す又蒸す乃蒸すを刻てか  
 くのよ入金の粉を蒸すことせよ  
 月和りよ時梅をよ換壇したる壇壁と竹根と一又  
 海塩の毫を早しとる内井と後へ毛泥とよま  
 他沙を入へしとせよれは味氣味よくよくなり



元刀細陰（すま）中刀細（すま）本と異月と夜とぬく（すま）ハ細（すま）本  
在常乃時（すま）とありぬく（すま）又ハ月（すま）を流（すま）る衛  
本とを（すま）り（すま）し

夏月改書と志（すま） 奈（すま）本（すま）整（すま）仁（すま）ニ（すま）キ（すま）雄（すま）實（すま）ニ（すま）キ（すま）

細果（すま）一（すま）と（すま）客（すま）と（すま）時（すま）在（すま）と（すま）其（すま）之（すま）本（すま）と（すま）居（すま）家（すま）

骨（すま）乃（すま）骨（すま）と（すま）燒（すま）ハ（すま）敗（すま）時（すま）免（すま）る（すま）也（すま）此（すま）

骨（すま）乃（すま）骨（すま）と（すま）燒（すま）ハ（すま）敗（すま）時（すま）免（すま）る（すま）也（すま）此（すま）

漢（すま）萍（すま）と（すま）流（すま）流（すま）と（すま）時（すま）也（すま）一（すま）と（すま）月（すま）令（すま）度（すま）義（すま）ノ（すま）元（すま）

一（すま）雄（すま）實（すま）ノ（すま）時（すま）也（すま）一（すま）と（すま）月（すま）令（すま）度（すま）義（すま）ノ（すま）元（すま）

一（すま）雄（すま）實（すま）ノ（すま）時（すま）也（すま）一（すま）と（すま）月（すま）令（すま）度（すま）義（すま）ノ（すま）元（すま）

一（すま）雄（すま）實（すま）ノ（すま）時（すま）也（すま）一（すま）と（すま）月（すま）令（すま）度（すま）義（すま）ノ（すま）元（すま）

一（すま）雄（すま）實（すま）ノ（すま）時（すま）也（すま）一（すま）と（すま）月（すま）令（すま）度（すま）義（すま）ノ（すま）元（すま）

一（すま）雄（すま）實（すま）ノ（すま）時（すま）也（すま）一（すま）と（すま）月（すま）令（すま）度（すま）義（すま）ノ（すま）元（すま）

一（すま）雄（すま）實（すま）ノ（すま）時（すま）也（すま）一（すま）と（すま）月（すま）令（すま）度（すま）義（すま）ノ（すま）元（すま）

一（すま）雄（すま）實（すま）ノ（すま）時（すま）也（すま）一（すま）と（すま）月（すま）令（すま）度（すま）義（すま）ノ（すま）元（すま）

一（すま）雄（すま）實（すま）ノ（すま）時（すま）也（すま）一（すま）と（すま）月（すま）令（すま）度（すま）義（すま）ノ（すま）元（すま）

一（すま）雄（すま）實（すま）ノ（すま）時（すま）也（すま）一（すま）と（すま）月（すま）令（すま）度（すま）義（すま）ノ（すま）元（すま）

一（すま）雄（すま）實（すま）ノ（すま）時（すま）也（すま）一（すま）と（すま）月（すま）令（すま）度（すま）義（すま）ノ（すま）元（すま）

一（すま）雄（すま）實（すま）ノ（すま）時（すま）也（すま）一（すま）と（すま）月（すま）令（すま）度（すま）義（すま）ノ（すま）元（すま）

東田（すま）祥（すま）扇（すま）摩（すま）羅（すま）去（すま）務（すま）被（すま）蓋（すま）於（すま）印（すま）供（すま）除（すま）

博覧考異卷四

三十一







凡<sup>子</sup>野<sup>子</sup>藥<sup>子</sup>乃<sup>子</sup>内<sup>子</sup>精<sup>子</sup>會<sup>子</sup>と<sup>子</sup>後<sup>子</sup>者<sup>子</sup>一<sup>子</sup>と<sup>子</sup>僅<sup>子</sup>て<sup>子</sup>無<sup>子</sup>事<sup>子</sup>と<sup>子</sup>る<sup>子</sup>が<sup>子</sup>れ  
 毒<sup>子</sup>也<sup>子</sup>保<sup>子</sup>元<sup>子</sup>と<sup>子</sup>く<sup>子</sup>古<sup>子</sup>月<sup>子</sup>そ<sup>子</sup>入<sup>子</sup>房<sup>子</sup>勝<sup>子</sup>似<sup>子</sup>灸<sup>子</sup>膏<sup>子</sup>旨<sup>子</sup>又<sup>子</sup>湯<sup>子</sup>と<sup>子</sup>入<sup>子</sup>  
 る<sup>子</sup>く<sup>子</sup>反<sup>子</sup>内<sup>子</sup>流<sup>子</sup>乳<sup>子</sup>内<sup>子</sup>と<sup>子</sup>休<sup>子</sup>一<sup>子</sup>野<sup>子</sup>毒<sup>子</sup>外<sup>子</sup>と<sup>子</sup>蒸<sup>子</sup>す<sup>子</sup>ん<sup>子</sup>と<sup>子</sup>ま<sup>子</sup>る<sup>子</sup>  
 甘<sup>子</sup>く<sup>子</sup>風<sup>子</sup>と<sup>子</sup>わ<sup>子</sup>く<sup>子</sup>り<sup>子</sup>冷<sup>子</sup>油<sup>子</sup>と<sup>子</sup>食<sup>子</sup>ふ<sup>子</sup>あ<sup>子</sup>と<sup>子</sup>暴<sup>子</sup>池<sup>子</sup>打<sup>子</sup>進<sup>子</sup>と<sup>子</sup>生<sup>子</sup>ん<sup>子</sup>温<sup>子</sup>  
 暖<sup>子</sup>す<sup>子</sup>の<sup>子</sup>抽<sup>子</sup>と<sup>子</sup>食<sup>子</sup>飲<sup>子</sup>して<sup>子</sup>大<sup>子</sup>と<sup>子</sup>飽<sup>子</sup>ら<sup>子</sup>が<sup>子</sup>れ

野<sup>子</sup>業<sup>子</sup>花<sup>子</sup>多<sup>子</sup>か<sup>子</sup>の<sup>子</sup>日<sup>子</sup>と<sup>子</sup>く<sup>子</sup>む<sup>子</sup>あ<sup>子</sup>と<sup>子</sup>流<sup>子</sup>と<sup>子</sup>寒<sup>子</sup>流<sup>子</sup>と<sup>子</sup>收<sup>子</sup>  
 て<sup>子</sup>な<sup>子</sup>り<sup>子</sup>と<sup>子</sup>流<sup>子</sup>く<sup>子</sup>一<sup>子</sup>昼<sup>子</sup>日<sup>子</sup>の<sup>子</sup>暮<sup>子</sup>一<sup>子</sup>と<sup>子</sup>内<sup>子</sup>水<sup>子</sup>と<sup>子</sup>く<sup>子</sup>け<sup>子</sup>  
 冷<sup>子</sup>寒<sup>子</sup>お<sup>子</sup>通<sup>子</sup>て<sup>子</sup>花<sup>子</sup>并<sup>子</sup>た<sup>子</sup>と<sup>子</sup>枯<sup>子</sup>と<sup>子</sup>月<sup>子</sup>今<sup>子</sup>廣<sup>子</sup>義<sup>子</sup>と<sup>子</sup>え<sup>子</sup>り<sup>子</sup>又<sup>子</sup>  
 老<sup>子</sup>圃<sup>子</sup>乃<sup>子</sup>と<sup>子</sup>噴<sup>子</sup>と<sup>子</sup>吐<sup>子</sup>き<sup>子</sup>さ<sup>子</sup>め<sup>子</sup>ら<sup>子</sup>る<sup>子</sup>用<sup>子</sup>と<sup>子</sup>く<sup>子</sup>流<sup>子</sup>く<sup>子</sup>ら<sup>子</sup>ひ<sup>子</sup>子<sup>子</sup>お  
 終<sup>子</sup>く<sup>子</sup>す<sup>子</sup>一<sup>子</sup>と<sup>子</sup>但<sup>子</sup>晩<sup>子</sup>と<sup>子</sup>く<sup>子</sup>流<sup>子</sup>朝<sup>子</sup>と<sup>子</sup>く<sup>子</sup>流<sup>子</sup>く<sup>子</sup>一<sup>子</sup>

月<sup>子</sup>今<sup>子</sup>廣<sup>子</sup>義<sup>子</sup>と<sup>子</sup>く<sup>子</sup>古<sup>子</sup>月<sup>子</sup>と<sup>子</sup>花<sup>子</sup>橋<sup>子</sup>と<sup>子</sup>水<sup>子</sup>と<sup>子</sup>く<sup>子</sup>た<sup>子</sup>土<sup>子</sup>と<sup>子</sup>い<sup>子</sup>茅  
 乃<sup>子</sup>原<sup>子</sup>平<sup>子</sup>の<sup>子</sup>畫<sup>子</sup>と<sup>子</sup>壅<sup>子</sup>と<sup>子</sup>一<sup>子</sup>と<sup>子</sup>一<sup>子</sup>  
 秋<sup>子</sup>の<sup>子</sup>比<sup>子</sup>颯<sup>子</sup>風<sup>子</sup>吹<sup>子</sup>雨<sup>子</sup>少<sup>子</sup>く<sup>子</sup>ハ<sup>子</sup>何<sup>子</sup>く<sup>子</sup>く<sup>子</sup>一<sup>子</sup>と<sup>子</sup>一<sup>子</sup>と<sup>子</sup>枯<sup>子</sup>を<sup>子</sup>と<sup>子</sup>  
 圃<sup>子</sup>く<sup>子</sup>一<sup>子</sup>茅<sup>子</sup>を<sup>子</sup>乃<sup>子</sup>枯<sup>子</sup>と<sup>子</sup>堅<sup>子</sup>く<sup>子</sup>と<sup>子</sup>一<sup>子</sup>又<sup>子</sup>橋<sup>子</sup>程<sup>子</sup>と<sup>子</sup>何<sup>子</sup>一<sup>子</sup>  
 比<sup>子</sup>月<sup>子</sup>並<sup>子</sup>と<sup>子</sup>食<sup>子</sup>ハ<sup>子</sup>目<sup>子</sup>と<sup>子</sup>昏<sup>子</sup>す<sup>子</sup>羊<sup>子</sup>肉<sup>子</sup>と<sup>子</sup>く<sup>子</sup>一<sup>子</sup>と<sup>子</sup>神<sup>子</sup>宗<sup>子</sup>と<sup>子</sup>湯<sup>子</sup>の<sup>子</sup>  
 聖<sup>子</sup>息<sup>子</sup>厚<sup>子</sup>鷲<sup>子</sup>菜<sup>子</sup>羹<sup>子</sup>と<sup>子</sup>食<sup>子</sup>す<sup>子</sup>と<sup>子</sup>一<sup>子</sup>又<sup>子</sup>生<sup>子</sup>菜<sup>子</sup>と<sup>子</sup>食<sup>子</sup>ハ<sup>子</sup>水<sup>子</sup>煎<sup>子</sup>  
 と<sup>子</sup>な<sup>子</sup>り<sup>子</sup>大<sup>子</sup>の<sup>子</sup>お<sup>子</sup>と<sup>子</sup>進<sup>子</sup>の<sup>子</sup>れ<sup>子</sup>と<sup>子</sup>終<sup>子</sup>牙<sup>子</sup>進<sup>子</sup>と<sup>子</sup>な<sup>子</sup>り<sup>子</sup>冷<sup>子</sup>食<sup>子</sup>と<sup>子</sup>一<sup>子</sup>  
 用<sup>子</sup>一<sup>子</sup>冷<sup>子</sup>水<sup>子</sup>生<sup>子</sup>破<sup>子</sup>果<sup>子</sup>油<sup>子</sup>臍<sup>子</sup>甜<sup>子</sup>食<sup>子</sup>と<sup>子</sup>る<sup>子</sup>食<sup>子</sup>す<sup>子</sup>ら<sup>子</sup>が<sup>子</sup>ら<sup>子</sup>れ  
 尾<sup>子</sup>羹<sup>子</sup>炒<sup>子</sup>燻<sup>子</sup>突<sup>子</sup>乃<sup>子</sup>存<sup>子</sup>味<sup>子</sup>皆<sup>子</sup>宜<sup>子</sup>く<sup>子</sup>わ<sup>子</sup>く<sup>子</sup>用<sup>子</sup>一<sup>子</sup>月<sup>子</sup>今<sup>子</sup>廣<sup>子</sup>義<sup>子</sup>  
 凡<sup>子</sup>之<sup>子</sup>乃<sup>子</sup>百<sup>子</sup>甜<sup>子</sup>瓜<sup>子</sup>と<sup>子</sup>る<sup>子</sup>食<sup>子</sup>す<sup>子</sup>ら<sup>子</sup>が<sup>子</sup>ら<sup>子</sup>れ<sup>子</sup>瓜<sup>子</sup>の<sup>子</sup>あ<sup>子</sup>と<sup>子</sup>一<sup>子</sup>沈<sup>子</sup>



月のハ大に毒ありし月令度義より毛下り又いづく  
 葦乃凡人と殺又油解と如し一合入り次物敷  
 威志よ此ハ白梅とゆき標と何まハ凡と合し一合  
 白梅と合し一又麝香をよく凡と消化す又石香  
 魚と鯉合寸寸ハ能凡と消し一水とをいハ中集  
 六月乃六候第一温風至中二蟬始鳴壁中三鶯乃  
 学習しんがく大小異乃三候なり中四腐草生ちく中五  
 土潤溽暑とくじく中六大雨時行とく大暑此二候なり  
 小暑昼六中刻二十四分夜三十九刻四十分大暑昼五十  
 八刻二十四分夜四十一刻四十分月令度最

土用

又土王さうけり

春ハ木旺もく一夏ハ火旺か一秋ハ金旺きん一冬ハ水旺すい  
 云ハ乃うら土ハ四時しよハ初めくわすしよハ事なり  
 春よ完かんれハ位いちハ春なり氣きちハ一ハ四時ハ  
 初はつより辰ちん未み戌しゆ丑しう月げつの事ことハ以もて寄よ旺わうとらず各  
 十八日一年よとくく七十二日あり此七十二日との  
 ころく時ときハ木もく火か金きん水すい又各七十二日つハ一  
 一年とたハ志しつれよ土つち木もくと如ごとうハ春はる土つち  
 用もちハ春はる秋あきの土用ハ土つち意い老らう一ハ威い一ハ冬  
 乃土用ハ水みづと木もくとれれハ春はるハ土つちと土つち



月廿六日金これ乃より更六日よむせざるあるは  
の五月と云く一土まればけしきよく金を生は  
あふ秋乃金とす人しきするより未だ月を火金の  
るあり又一葉乃中なるれ中央の土一金を  
きよ揚ぐぬりの序とがぬ乃をあふ月金あそ  
きあはれ次は中央の土とのきより  
和國倍之原の百目  
とさうありとれと  
かろく一土その後とあれは  
うればけしたるより中

倍元は六月七月は入口蕪及赤豆と金豆ハ瘦瘠と  
群として今の人のよくさる事ありこれハ保氏如流  
乃葉まればきよ一こぬればさうやくとさるより  
倍り葉紙の紙よきうやくと蕪なりとあれハゆい  
くよりさるよりなりとさう事とさうれば後と云

群はあまのよ種破つとよく芳人正月食立年  
以群屬氣性蕪葱韭蒜薑也又賦後方に元日及  
人日麻子小豆各七枚と群を疾疫を清すといふ  
これよの葉初のまじりなり事といふとさうゆい  
事と倍りあやまりて六月よすよりわねた紙  
人よるあり

六月廿六日七月乃中よ揚ぐより  
七月土月の内よ蕪とさう塩と分群至人  
其さやけ  
滋陰下



白乃久しきやまざる用くとれは強ひりか  
 衰えたる病人は用事能高亡（高亡）と強ひり用ひ  
 未（未）薬（薬）よく考へてし

日本本草綱目記卷之四畢



